

学習成果の自己評価（キャリア開発総合学科）

キャリア開発総合学科では、建学の精神と卒業の認定に関する方針を基盤とし、「地域社会に貢献するための豊かな人間性と社会性を備えた人間育成」と「キャリア教育を通じた職業人としての意識と能力の向上」を教育目標に掲げ、これに基づき学習成果を定めている。

本学科は多彩な科目を配置し、分野をまたいだ履修を可能にしているため、学科全体の学習成果に一律の具体性を持たせることは難しいが、現在設置している9つの分野（系）で展開する科目一つ一つにおいて、専門的学習成果を具体的に定義し、汎用的学習成果との関連をシラバスに明示している。

学習成果の測定可能性については、単位取得状況、GPA、資格取得・検定合格状況、就職等進路状況といった量的データ、およびPROGの結果、学習成果の自己評価、雇用先・卒業生アンケートといった質的データを用いて測定が可能であると捉えている。

令和6年度の実績において、進路決定率98.7%、就職決定率98.6%、正職員率94.9%と非常に高い数値を維持している。

キャリア開発総合学科では、ディプロマ・ポリシーに掲げられた学習成果の獲得状況を多角的に把握するため、量的データ（定量的指標）と質的データ（定性的指標）を用いた測定の仕組みを有している。

量的データとしては、単位修得率、GPA分布、資格取得率、就職率といった従来の指標に加え、学生の汎用的能力（ジェネリックスキル）を客観的に測定するPROGテストの結果を核となる指標として活用している。また、質的データとしては、学生による「学習成果の自己評価」や「学生アンケート」及び「雇用者へのアンケート」などを定期的実施しており、これらのデータは、教育の質の向上・充実に図るためのPDCAサイクル（教育課程の点検や学習支援方策の検討）に活用されている。

1. 量的データ（PROGテスト）による測定結果（令和6年度2年生）

令和6年9月～12月に実施されたキャリア開発総合学科2年生（受験者数146名）のPROGテスト結果に基づき、以下の傾向が確認された。

(1) リテラシー総合の全体傾向と成長状況

リテラシー総合の平均レベル（Lv.1-7段階中）は3.4であり、基準集団（私立短大文系2年）と比較して、特に大きな課題は見当たらない状況である。しかし、1年次（令和5年4月受験）と2年次（今回）のスコアを比較した成長分析（集計対象者146名）の結果、リテラシー総合スコアは1年次の3.55から2年次には3.36へとわずかに下回る傾向が確認された。

(2) 能力要素別の伸長と課題

リテラシー要素別の成長状況を見ると、1年次受験時と比較して、情報収集力、構想力、言語処理能力、及び非言語処理能力はスコアが上昇している。一方、情報分析力（1年次3.24から2年次3.05に低下）と課題発見力（1年次3.05から2年次2.83に低下）は、1年次受験時のスコアを下回っている。これらの結果から、基準集団と比較して、今後能

力の全体的な引き上げが望まれる要素として、リテラシー領域では情報分析力、課題発見力が特定されている。また、コンピテンシー領域では計画立案力の全体的な引き上げが望まれている。対照的に、学生の優位性として、コンピテンシー領域の親和力、自信創出力、及び実践力については、標準誤差の下限が基準集団を上回る結果（優位性）が認められている。

2. 質的データ（学生アンケート）との関連分析

学習成果の伸長度を示す PI 値（ProgressIndex）と、学生の学習行動に関する自己認識（質的データ）を関連付けた相関分析（対象学生 142 名）を実施した。特に、「1 年次の PROG テストの結果から自分の課題にどのように取り組んできましたか」（Q3）という、学生の課題に対する主観的な取り組み意識と客観的な能力伸長度との相関を分析した結果、課題発見力の PI 値との間に、1%水準で有意な負の相関関係（相関係数-0.23）が確認された。この結果は、学生が「課題に意識して取り組んだ」（質的データ）という主観的な努力と、「客観的な課題発見能力の伸長」（量的データ）が逆の傾向にあることを示している。これは、学生の自己評価に基づく学習行動が、必ずしも汎用能力の客観的な伸長に結びついていない実態を裏付けている。

3. 測定結果の活用と今後の課題

PROG テストは、必修科目である「聖和総合教育」「キャリアデザインⅠ」「キャリアデザインⅡ」「キャリアデザインⅢ」「ベーシックゼミ」などの学習支援方策の点検に活用されている。測定結果により、リテラシー要素の一部である情報分析力、課題発見力、計画立案力といった、高度な思考に関わる汎用能力の育成が課題として明確になった。また、主観的な学習意識と客観的な能力伸長との間に負の相関が見られたという重要な質的・量的データに基づき、今後は、学生が自身の課題を客観的な根拠（PROG の結果等）に基づいて正確に認識し、その認識に基づいた行動が、具体的な能力伸長に効果的に結びつくよう、教育内容や指導方法、フィードバックのあり方を改善していく必要がある。これらのデータは、教育の質保証と継続的な改善を図るための重要なエビデンスとして利用されている。

表 PROG 測定結果のまとめ(令和 6 年度 2 年生)

PROG 要素	2 年次平均スコア	1 年次からの変化	基準集団比の評価
リテラシー総合	3.36	やや低下 (3.55 → 3.36)	課題なし
情報収集力	3.07	上昇	-
情報分析力	3.05	低下	▲ (全体的な引き上げが 望まれる)
課題発見力	2.83	低下	▲ (全体的な引き上げが 望まれる)
構想力	3.16	上昇	-
計画立案力	2.26 (計画評価)	-	▲ (全体的な引き上げが 望まれる)
親和力	3.44 (対人興味/共感)	-	◎ (優位性が認められ る)
自信創出力	2.89 (自己効力感/楽観 性)	-	◎ (優位性が認められ る)
実践力	3.23 (実践行動)	-	◎ (優位性が認められ る)
Q3 (自己課題への取り組 み) PI 値相関	-	-	課題発見力 PI と-0.23 の 有意な負の相関

<令和 6 年度卒業生の学習成果の自己評価>

カリキュラム・ポリシーからディプロマ・ポリシーの達成へ繋ぐ到達度を測るために、複数の評価項目を設定し、それぞれ、5 段階評価 (【1(全くできない)】～【5(8 割以上できている)】) として回答を求め、1～5 点の点数化を行った。①1 年前期、②1 年後期、③2 年後期 (卒業時) の 3 時点の推移と①→③のペア比較で可視化した。

キャリア開発総合学科全学生に共通の基礎的能力(ヒューマンスキル)に関するものとして 4 つの評価項目「計画・実行・改善力」、「社会人基礎マナー」、「PC 活用・プレゼンテーション力」、「資格取得への取り組み状況」を設定した。

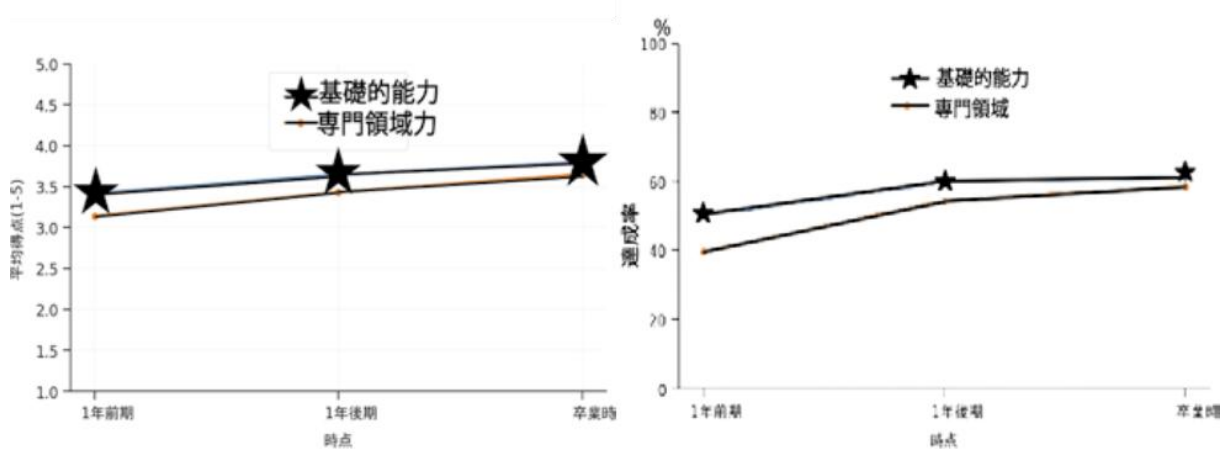
学生は各自自身の将来に向けて自由に分野を選択して履修しているので、9 つの専門分野(系)毎に、3～5 つの評価項目を設定し、学生が自身で履修している専門分野について回答を求めた。

各時点での平均得点

大区分	1 年前期	1 年後期	卒業時
基礎的能力	3. 412	3. 644	3. 797
専門領域	3. 139	3. 430	3. 650

達成率(4 点または 5 点の割合)

大区分	1 年前期	1 年後期	卒業時
基礎的能力	50. 2%	59. 8%	61. 2%
専門領域	39. 6%	54. 3%	58. 5%

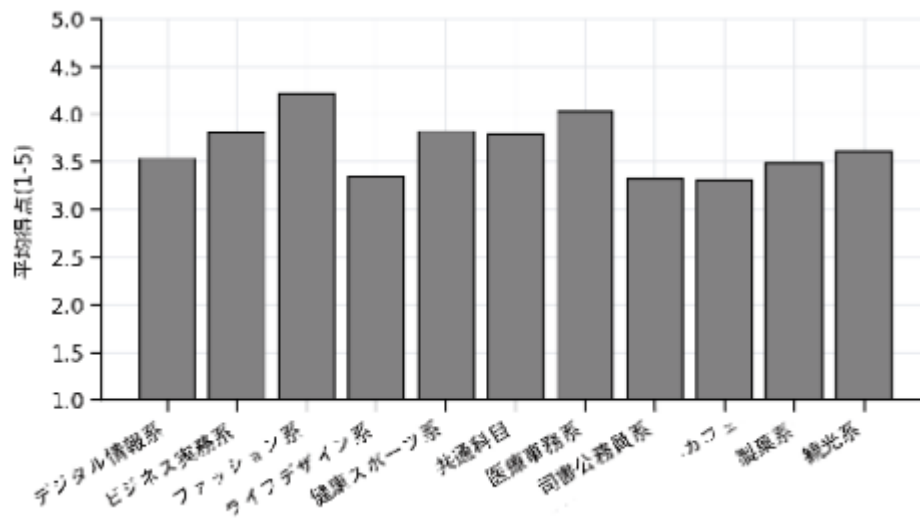


学生の自己評価において、2つの大区分、基礎的能力と、専門領域に分けて評価すると、評価項目の平均点も回答に高評価の占める割合も、基礎的能力は1年生前期→1年生後期で大きく伸長し、卒業時で高水準を維持する傾向が見られる。専門領域では1年生前期の初期値が相対的に低い一方、1年生前期→1年後期での伸びが大きく、卒業時でさらに向上する結果となった。これは、演習・実習・プロジェクト型学修（PBL）などの実践的な学びが成長を後押ししている可能性を示している。

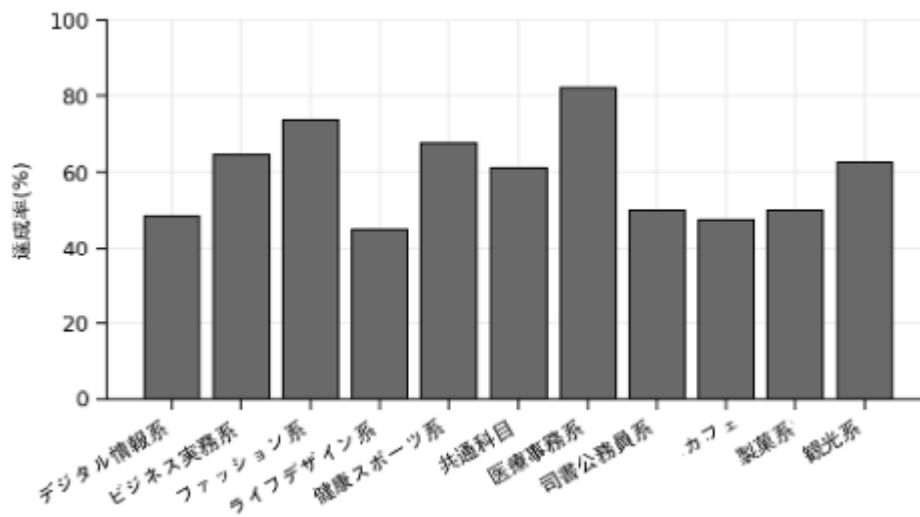
系別に平均得点と得点率をそれぞれ集計した。系別の特徴として、③時点（卒業時）の平均得点が高い系（例：ファッション系、医療事務系、健康スポーツ系）では、成果発表や技能評価などアウトプット機会が多く、自己効力感の醸成につながっていると考えられる。一方、③時点の自己評価得点の水準が相対的に低い系（例：カフェ、ライフデザイン系、製菓系）は、比較する基準が高レベルで到達目標が高い故であり、これらの分野でも①→③の成長幅は大きく、学習経験の積み上げにより着実な伸びが確認された。

同一学生の①→③の変化量を用いたペア分析では、全ての系で平均差分が正となり、卒業時に確かな成長が確認できた。特に、カフェ、ファッション系、製菓系、観光系などで成長量が大きく、実習・演習・グループワーク等の参加型学修が成果向上に寄与していると考えられた。

履修系別の自己評価平均得点



履修系別の自己評価得点率



履修系別の自己評価得点平均差分(卒業時1年前期の差分のペア比較)

